此の句の三聖と言ふのは支那の三聖をさして言ふたものであつて孔子孟子荀子の聖人を稱へたのであらう。其の人達の一堂に會して坐せる其の前に醋の壺を置いて居る。其の醋の壺には醋が醱酵して強い臭いを發して居る。そこで今迄は平談俗語に時を移して居た三聖の各々の顏が顰縮して來たと言ふのである。實際の場合の光景を取つて句としたと言ふ樣な觀察から見れば輕いユーモアの附纏つた句であると考へられるのであるが一歩深く踏み込んで三聖の心持を探つて解すると容易でなくなつて來るのである、それを詳述する事は略するが此の三聖の學說と言ふものが異つたものであると言ふ事は誰しも知つて居る事であらう其の三聖の主義主張と言ふやかましい問題をこまゞゝと討議されてゐるのではなくて桃の花の咲いた下に三聖が陣取つて平談俗語でもして居る樣な場合であつて

平談俗語の中にも三聖の性格と言ふものが出たがるものである。何かの語の中に三聖の心のまちゞゝな點から意見を異にすると言ふ樣な場合はあらうけれどもさう言ふ事は少しも顏に現はさないで何時も春風駘蕩たる顏をして居る所に醋が熟して急に強い匂ひを發しるので、三聖がしかめつ面をしたと言ふのである。茲に醋の壺を持來たした事にも來歷があつたであらうが、それは良く知らない。かうして三聖の顏を顰せしめたと言ふ事に作意があるのであらう。要するに三聖の平和な心を亂す物は何物もない。互の言葉のあやも大した事もなく、和平を保つて居るのであつたが、或る酢ばいものゝ匂ひには顏を動かして顰縮しなければならなかつたと言ふ樣な諷刺を加へて居るのである。繪畫を見た時にはしかめ面をして居る所は書かれては居ないであらうと思はれるが顰すと言ふ文字を加へて俳句

に作られて見ると其のしかめ面をして居る所が見える樣である。此の句は矢張り漱石氏一流の皮肉とか諷刺とかをちよつぴりと調味したのである。併し乍ら其の諷刺の輕い所に三聖とか、桃の花とかの、調和があると思ふ。

此の句は顰すと言ふ文字に續いて桃の花と置かれた所に面白味があると思ふ。それは三聖が三聖とも桃の花に譬へられて居る所にあるのであつて、稍々赤味を帶びた所の色、又は白桃の花もあるが、要するに桃と言ふものに三聖が譬へられて居る。さうして見るに三聖がしかめ面をしたと言ふ事が桃の花のさう美しくもない花びらのちゞくれて居る樣な光景に似通つた感じがある。此の句に桃の花を配したと言ふ事は支那人は桃花とか、梨花とか、杏の花とかを喜ぶのであるが此句は梨の花や杏の花ではいけない。桃の花の方が感じの上から言ふても適切である。さう言ふ點からして桃の花を配合したのであると考へる。漱石民の俳句の內で佳句とせなければならない。

古事來歷を知らない爲めに此の句の內容に深く立入つて解釋する事は出來なかつたのを遺憾とする。諸君の示敎に待つ。

折り添へて文にも書かず杜若　漱石

此の句は手紙と、杜若とを或人の所へ送つた、其の時の有りのまゝを句にしたのであつて、杜若を折つて來て手紙に添へたけれども、其の事は手紙の文言の中には認めなかつたと言ふ、卽興的の事柄に過ぎなかつたのである。けれども其處

に却つて此の句の面白味がある。杜若を折り添へ、其の上に手紙に「杜若を御目にかけ候」と書いては重復すると思ふ　つゝましやかな用意からして手紙には書き加へずに手紙と一緒に杜若を添へ　所にゆかしい心柴が見える様である。

此の杜若は家の庭に咲いたものであらう。勿論大きくふくらんで、今にも紫の美しい蕾を破らうとして居るのを折取つて其れを人に送ると言ふ事は、艶めいた感じを起して來るものである。さうしてそれに添へた手紙に書かれて居る文書もやかましい手紙ではなくて杜若を呈上する爲め書きなされた手紙である様なものと思ふ。杜若を送ると言ふ様な事は誘りかに感ずるので其れは認めない。只手紙に杜若を添へるだけで美しい感じがするのである。其の手紙を受取つた人が何んな感じを持つて此の手紙と杜若を受取つたであらう。つまり送る人と送られる

人との心の底に一脈の優美なものが横つて居る。

鱸魚肥えたり樓に登れば風が吹く　漱石

鱸は俳句の秋の季題にある。鱸の肥えて油ののりきつたと言ふのは秋の中ば頃ではなからうか。鱸の捕れる濱と言ふ様な所の漁場とか町とかであつて其の町の海岸に近い所に酒樓がある。其の酒樓に上つて居ると秋風が吹いて居て、自分の坐つて居る部屋の中迄風が吹き入つて居るといふ様な景色を得て此の句を作つたのであらうと思ふ。

此の句の趣味はどちらかと言へば支那人の作つた詩の中に出て來る様な頽唐的

の趣味であつて同時に大まかな叙法を以て此の内容を現はさうとして居る所に唐時代の詩でも詠んで居る樣な心持がする句である。かう言ふ句は作者の生活がどうであるとか、個性がどうであるとか言ふ事に少しもわずらひをせられずに、只事實其の儘を詠じて、實際見た事。感じた事を些の技巧も用ひずに詠嘆してゐる。明治時代の俳句は此の風調の中にも生命を保つて居たのである。此の句も其の時分の產物であつて、何の事もない見た儘を描いたと言ふ樣な所に價値を見られるのである。尙句法の上から此の句を考へて見ると此の句は二段切にして詠むべき句である。それは內容の上から言へば三句にして「鱸魚肥えたり」を一句とし「樓に上れば」を一句とし「風が吹く」を一句として、其の間の趣味の連絡を取りつつ靜に味ふ可きものではあるが、又叙法も其れに伴なうて三句にして段落を結び

つゝ詠ず可きものであらうが、此の句を讀んで見ると實際には「鱸魚肥えたり」を一讀とし「樓に登れば風が吹く」を一句として詠み下す方が光景が纏つて頭の中に入つて來る樣に考へられるそれは何う言ふ譯であらうか。「樓に登れば」のばが次の意味の連續を促す樣な文字であるので從つて其の添景を描がなければ一句に成り難いと言ふ樣な譯ではなからうか。又「樓に登れば風が吹く」と一句として詠み下す事を促して居るのは上の「鱸魚肥えたり」と言ふ文字にも起因して居るのである。「鱸肥ゆ」とか「鱸肥えぬ」とか和音にすれば「樓に登れば」と詠んで一句とし「風が吹く」で一句とした方が意味を取るのに明瞭に看取されるのであるけれども、それがさう行かないのは「鱸魚肥えたり」と言ふ漢語の讀み方であるので文字の上から俗言と隔つて居る所に修飾されて居るのであるから下に來る所のも

のも多少氣取つて述べなければ修まらないのである。然るに此の句では「樓に登れば」と言ふ平坦な詠み方をして居るのであるから利かないのである。即ち頭句が勝ち過ぎて居るからかもしれない。かう言ふ漢語の讀み方を踏襲した俳句は蕪村以來に於ては未だ文章を書くのにも言文一致は餘り用ゐられない時代であつたので、詩にも此の調子が試みられたりしたものであらう。けれども今日はかう言ふ漢語の調子を持つた句は影を潜めてしまつて見る事は出來ない。私等後輩の者がこの句を詠んで見るとかみしもを着て歩く樣な考へがして俳句らしい味ひを見出す事は出來ないのである。かう言ふ調子の武張つた句の内に面白味を見出す事は出來さうもない。

水仙の葉はつれなくも氷かな　漱石

此の句は水盤に活けてある水仙を詠んだものであらうか。水盤の石や、砂の中に水仙玉も交つて居て、水に浸されて居るのである。水仙の花も少し咲いて居るのであると思ふ。水仙の葉が水盤の上に青々と繁つて居ると言ふ樣な光景許りではあるまい。或朝の事、水盤の水が氷つてしまつて居る。水仙の葉は氷の上に垂れて、葉先が氷の中に閉ぢられて居るのを見た。冬威の詰晶とも見られる氷の中にかよわい水仙の葉先が閉ぢ込められて居ると言ふ事はいたゞしい光景である其の水仙を眺めて居ると水仙は冬威の爲め弱り果てゝ何物かの助けを借りて生き生きとして居たいと乞ひ願ふ事であらう。であるのに少しも自分を助けて呉れる

ものもなくてよるべのない所から元の通り葉を垂れて居る。其の葉先が氷に閉ぢられて居るのを見ると、恰も氷をよるべとしたかの樣に見られる。寒い中にも氷に閉ぢられて何うする事も出來ずに居ると言ふ、水仙の葉に段々に同情が籠つて水仙は自然の儘に氷に閉ぢられたのであらうけれどもそれが氷に閉ぢられたのをよるべとして居ると言ふ樣に作者のやさしい同情心が水仙に移されて此の句に詠出されたのである。

此の句の「水仙の葉はつれなく」といふのは字義は傲岸と言ふ意味ではないたよりないと言ふ意味である。傲岸と言ふのでは全く意味をなさない。水仙の葉がたよりない樣に柔らかい葉先を閉ぢられて居る所に此の句の生命があるのであるかう言ふ主觀句は漱石氏の俳句には珍らしいのであつて漱石俳句集中に容易に見

出す事の出來ないのである。●

二十八　鳴雪の俳句解釋

夕月や納屋も厩も梅の影　鳴雪

大きな百姓屋か何かであつて、雜穀や、薪木、農具、其他種々のものを入れて置く納屋もあり。又馬も使つて居るので厩もある。其の納屋であるとか、厩であるとか言ふざつとした建物が庭に幾つもあるのであるが、夏や秋の時分であると百姓家の庭は日が暮れてもかたづかずに忙しくして居るものであるが、未だ早春であつて百姓家には是れと言ふ忙しい仕事もないのでもう日暮方には二三人

の人が井戸の傍で足でも洗つたり、納屋に鍬でもしまつたりすると其の後は靜なものである。此の句は其の早春の夕方の光景であつて廣い庭はもう暮色にとざされてしまつたのであるが、其の上には夕月が浮び出て居るのであつて、其の夕月はほのかに庭を照らして居る。庭の中には梅の木があつて花が咲滿ちて居るので其の影が納屋を襲ふて居り、又厩をも襲ふて居る。厩の中には馬が月光の下に顏をほの暗く照されて秣桶に首を突き込んで音をさせて居たり納屋の中には味噌桶の蓋を閉ぢて去る音もするであらう。さうして馬や、人も梅の影を蹈んで居るのであるが、其の納屋にも厩にも梅の影が蔽ひかぶさつて居ると言ふのは、如何にも大きな庭の感じが出て居ると思ふ。此の句が若し「夕月や納屋のひさしに梅の影」とか「厩の中に梅の影」とか言ふたのでは單純な叙景であつてそれだけでは

廣々とした庭を想起する事は出來ないのであるが、納屋も亦厩もと言ふので其庭の廣い景色を喚起させて來るのである。さうして納屋に梅の影があるとか厩に梅の影があるとかの一つを拔き出して來ると其のものだけが大きな事物になつて他の脊景が目に寫つて來ないのであるが。納屋も厩もと竝べるに依つて小さな事物に化せられてしまうのである。それだけに脊景が附纏つてくる。つまり局部的でなくつて稍々全體の描寫となる。それだけに輪廓には傾き易いけれども其の輪廓は外部ばかりのものではなくて充分に內容の包まつたものであるので、さながら一個の大幅の畫として見る樣な心持がする。さうして夕月の下に梅の影をあびて居る、納屋や厩と言ふものが落付いた色で描かれて居るので、非常にいゝ感じを起させるのである。客觀描寫のすぐれた句である。

大妓小妓起き出でて牡丹日午なり　鳴雪

此の句は昔の遊女屋と言ふやうな所を詠んだものか、又は支那の小說に出て來る妓樓を材料としたものか。分らないが兎に角大きな妓樓であつて美しく着飾つた大妓や小妓が日が高くなつてから起き出して欄干に出て居たり、廊下を歩いて居たりするのであつて、其れだけの光景でもあだめいて見られるのであるが其の大妓は廊下に出て顏を洗ひ嗽ひでもして居るので大妓を取卷いて小妓が洗面の水を取つたり、色々の下まわりをして居るのである。庭には丁度牡丹が咲き盛つて居るのであつて其の白い花や赤い花が妍を競つて咲きほこつて居る。其の牡丹に

は晝の日が當つて居るので強い初夏の日をすうて一層牡丹は輝いて見られるのである。さう言ふ大妓小妓と言ふものと、牡丹とを取り合せた丈では新らしいとも考へないのであるが、併し乍ら大妓小妓起き出でてと言ふだけでも餘りにあらはであつて優美の感じを起さないものである。牡丹と言ふ花をあしらつて其處に始めて俠艶な感じがともなつてくるので、此の牡丹の二字は大妓小妓の妍美を喚起する上に於て不必要なものとは思はれない。それがあつて始めて濃艶な感じを起してくるのである。つまり「大妓小妓起き出でて日午なり」と言ふ事と牡丹と言ふ相應したものをあしらつて其處に始めて一句が構成された譯なのである。

荻の葉に折々さはる夜船かな　鳴雪

或大きな江であるとか、川であるとか言ふ樣な處を夜深くなつてから漕ぎ上る舟又は下る舟が、中州の樣な所又は岸邊などに生ひ繁つて居る荻の葉に舳がふれて行くのであらう。さら〳〵と言ふ音を立てゝ直ぐに荻の葉は後になつてしまふ。又舳か、船の腹かに荻の葉のふれて鳴る音がすると言ふ事を詠んだのであつて、入江の事であるからさう水の深い處とは思はれないけれども、靜かな夜の底を動いて行く舟の中に居る人は決して良い感じのするものでなくて、氣味の惡い樣な、恐ろしい樣な感じの萠されて居るのであつて、神經が鋭敏になつて居る。其處へ荻の葉が風に吹かれる音が遠くの方でしたり、又は舟の舳でしたりすると愈々心がおびえるのである。其の時の心持は何に譬へ樣もなく寂しいものである

此の句はさうした時の有様が目前に現はれてでも來た樣に直ぐに感激を受けさせられる句である。此の夜舟と言ふのは定期船と號する樣なものではなくつて小舟かなぞに乘つて極短い間水上を行くと言ふ樣な場合ではないかと思ふ。有りのまゝを述べて居るのであるが寂しいとか、恐ろしいとか言ふ作者の心の側の事を述べずに客觀の事實だけを描いて居て其處が力强い描寫となつて居る。なまじい作者の主觀の加はらない所に却て眞實味が潜んで居るのである。

火にほてる顏と顏とや冬籠り　鳴雪

閉ぢ込めた一室の中に火鉢を置いて、其の火鉢のへりに手をかざして二人の人

が居ると言ふ樣な場合であつて、其の二人ともが少し上氣して顏が赤くほてつて居る。其の一人は作者自身であり、他の一人は婦人でゝもあるか、分らないけれども、兎に角二つの顏が相對して居るのであつて、話しでもして居ると言はうか又は話の絶間に顏を上げ、面を合はせた瞬間であるか、分らぬけれども男同士が對座して居るのでは何んとなく物足りない心持がするのである。對する人は女であると其處に一種の情味が湧いて來るのである。其の人達は冬籠りをして居ると言ふのである。只火にほてつて居る顏と顏があると言ふだけの事しか現はして居ないのであるが、充分に其の場所なり情景が目に浮んで來る。淡い情味の句であると思ふ。

二十九　碧梧桐の俳句解釋

遡りて君を迎へぬ春の水　碧梧桐

此の句は春の川とか湖とかの場所を持つて來て、それに人事的の情趣を加へられたものである。或大きな川の上に舟を浮べて居て其の中には一人二人の人を乘せて居て其の舟は竿さしつゝ川を遡つて行くのである。其の舟と言ふのは屋形舟の樣なものであるか、又は遍舟でゝもあらうか、兎に角盛裝を凝らして居るのではなくてさつぱりとして何の裝もしないと言ふ樣な、舟であつて今日自分等を尋

ねて呉れる人を迎ひ入れるといふので、其の人を或る所まで迎へに出るのである。舟の中の人は男であるか女であるかは、はつきりしないが、これを重々しく考へれば一國の主でも迎へると言ふ事にも解せるし、又時めいた人を迎へる事にもなる。けれども此の場合はさう言ふ殺風景なのでなく、舟で迎へるのは郎であつて迎へられるのは女であると言ふ樣なのではないかと思ふ。それは君を迎へぬと言ふ。君と言ふ文字が春の水といふやはらかな感じから押して、何うしても男女の相逢ふ意味が加つて、そこに情趣を生んで來る樣に考へられるからである。迎へられる人は其の舟よりも、川上に居て岸邊に待つてゝも居るのか、それとも舟の中にでも居て竿さしつゝ下つてゝも行きつゝあるのか、何れにしても迎への舟と其の舟とは相逢ふ所に興味はあるのである。兎に角河流のどの邊かで女を迎へて

居たが、其の時女の若し岸邊に舟を待つて居たとしたならば、其の舟に同乘して川を下るのであらう又は舟は相竝んで下ると言ふ事にもなる。二人同乘して春の川の中を竿さして下る、人を迎へたと言ふのが此の句の主眼となつて居るのであつて、一種の艶めいた美しい感じがするクラシカルな戀の物語の一説を讀んで居る樣な心持がする句である。

茨のちる水を覆うて樗かな　碧梧桐

或水邊の所に雜草や、篠竹やが生ひ繁つて居る中に水に望んで茨の花が咲いて居て、其の花が風もない晝の日の下にはら〳〵と散り込んで居る。此處迄の景色

を考へると明い感じがするのであるが、其の茨が小さな花を附けて居る木であつたり水の上に茨の花が落ち散つで居たりする其の上下の光景は明るい。それを推し沈めて蔭ある水を覆うて樗の木がかぶさつて繁つて居ると言ふのである。樗の木にはまゝ大樹もあつて野中なぞに繁つて居たり、又は水べりなぞに峙立して枝を天蓋に廣げ、四隣を壓してゐるのを見受ける事もあるのであつて、此の句に詠まれて居る樗も相當な大樹であつて水の上にかぶさつて薄暗い影を作つて居るのであらう。其の影になつた所の水と水に望んで咲いて居る茨の花のはら〳〵と落ちて居ると言ふ樣な水べりに見受ける光景である。

單に水の上に茨の花が散つて居ると言ふ樣な材料で俳句を作つたのは幾らも見受けるし其れ丈けの材料でも相當に混み入つた寫生をして、巧に現はされもする

のであるが、此の句は其れ丈けの寫生に一層道具が複雜にして水の上には茨が散つて居る。其の茨の散つた花をじつと眺めて居ると茨の落花のして居る水の狀態が目に寫つて來る其の水の上にかぶさつて居る樗の大きな影が落ちて四隣を暗くして居る。卽ち茨の散つて居る水の上に今一つ樗を取り合せて居る所に複雜した光景を描き出して居るのである。作者が單なる光景には滿足しないで複雜な光景を消化して俳句を作らうとした努力を認めなければならぬ。此の樗を持ち來された爲めに水の表は暗いけれども茨の落花が一際白く見えると言ふ樣に技巧的に色の配合が生れて來る事も思はれる、其の邊の色を出さうとする事も作者の句作の用意ある所として考へられない事もない。

山潰えし　又の噂　さや秋の雨　碧梧桐

秋の雨が日々に降り續いて居る。さうして何時止むとも見えない。山の中に住んで居る人達は初めの內は鬱陶しい事とばかりにしか感じないのであつたけれども、連日の雨に段々不安の念が伴つて來る。山林なぞに降り込む秋の雨は長くなつて來るに從つて土がうんで來り、木の根はゆるんでしまつたりするので水は山から谷へはふり落つるので其の山々の水を集めて來る所の川水は岸を打つてすさまじく狂ひ鳴る夫を耳にし其の瀨音の强まさるのを雨の中に聞き出して一種言はれぬ心の寂寥を感ずるのである。さうした不安の念にかられて居るのであるが山峽の邊りは土がうんで其の中に籠つてしまふた水が籠もり切れなくなるとその廣

い面積を持つた土を持ち上げて土をくつがへして谷へ落下するのである。さう言ふ山崩れの時には其の山峡にあつた家とか樹木とか言ふものは悉く押し流されたり、土に埋められたりしてしまふのである。其の山崩の大きなものは、非常な音響を起す爲に其の音が四山に響き渡つて恐ろしい感じを起すものである。又部分的の小さな山崩れであつても人畜を損し、樹木を倒して恐ろしいものとなつて來る。此の句は山峡に住んで居る人が連日の秋雨の結果山崩れが何處とかの山の邊りにあつたと言ふ事を聞いて居たので自分等の住んで居る邊りにも山崩れがしはしないかと言ふ樣な事も氣にかゝつて不安の念に襲はれて居る。其處へ又何處やらに山崩があつたと言ふ事を小耳にはさんだと言ふ其の刹那の人の心持を描き出したのである。此の句は只客觀的に山崩があつたと言ふのでなくて恐怖にから

れて居る所へ又山崩れの噂を聞いたと言ふ樣な事から一種の恐迫觀念を胸に宿したと言ふ樣な心持が働いて出來上つた俳句なのである。

鞍とれば寒き麥や馬の尻　碧梧桐

此の句に詠まれて居る馬はさう立派な飼馬と言ふのではなくて、荷物を運ばせるとか、旅客を乘せるとか、さうした鞍馬のたぐひであらうと考へられる。一日の仕事を終へたか、又は宿に歸りついた時でもあるか、荷物なり、旅客なりは町とか、宿場で下ろしてしまつた後なので、我家に歸つて來たとか、若しくは馬宿にでも、たどりついて馬を厩にしまふ前の事である、馬は厩口につないで置かれ

て博勞か、百姓か分らぬが馬の蓐轡をはづし、あぶみを取りのけ、さうして尖つた背中に跨り乘せてある鞍を取り下ろされたのである。その裝を取りのけられた後の馬は裸馬であつて見すぼらしい姿となつてしまふのである。此の句は今迄裝をして居た馬から鞍の取りのぞかれた時の心持を詠じようとしたのであつて鞍の取られた後の馬の尻が如何にも寒さうに見えた。寒さうに感ぜられたと言ふのである。只其れ丈けの叙事を如何に生かさうとしたかと言ふ事は此の句の生命なのであつて今迄は馬の尻べたの邊りは目立つて寒さうにも感ぜられなかつたのであるが、素裸にされた所の空尻は、餘り肥えても居ないと見へ、其の上空脛が突立つた上にげそりとそげた馬の空尻が乘つかつて居るのは餘り豐かな感じを起さない。寧ろ哀切の感を深くするものである。其の空尻の所に冬であるので寒風

が吹き當てゝ居るのでトもあらうか。それとも只寒い日の事であるか、一層馬の尻が吹きさらされになつた儘突立つて居ると言ふ事はいよ〳〵寒さうな感じをそそるものである。此の句の場合に於てはさう時間的に重きを置いて居るのでなくて鞍を取り去つた後の馬の尻が寒さうに見える。其の馬の尻が外から見てばかりでなく馬自身も寒さうな姿をして居ると言ふのである。馬の寒さうな姿をして居ると言ふ事が著しく作者の感興を引いて此の句をなしたのである。つまり作者の心持が大元となつて此の句が作られたのである。物を取りのけた後が寂しく感じると言ふ樣な事は因襲的の感じであつてさう新しいとは思へないのであるが、此の句は寂しいと言はずにそれを「寒き」と言ふて時候の方に換へて、心持の方よりも、もつと強い意味の「寒さ」と言ふ自然の力に換へて居る所に少しも因襲と言ふ

感じがなく寧ろ客觀的に描寫されて居る樣な所があるけれどもそれは「寒き」と言ふ字が強い爲めに寂しさと言ふ樣な小さい作者の考へが其の中に包含されてしまつて居るのであつて、作者の主觀が自然に包含されて主客一體となつた所の言葉となつて此の寒さと言ふ文字が出て來て居る樣に此の場合は考へられるのである。其れから「寒き」と續いて「姿」と言ふ字が結び付けて居る所は馬其のものからして鞍を取られた後の空尻を現はす爲めには適切の言葉であつて作者の温情が此の馬の尻に注がれて居る所に價値がある。であるから、此の「寒き姿」と言ふ主觀語は他の文字又は他の時候に換へてはもう意味をなさないものとなつてしまう。卽ち「鞍とればぬくき姿や」とか「鞍とれば暑き姿や」とか言ふたのでは、もう鞍を取つたと言ふ肝腎の事象と馬との間に起る感興と言ふものが意味をなさないで只

煩雜なものとなつてしまふ。此の句の「鞍とれば寒き姿や」の「寒き姿」は動かす事ぬ出來ない。

三十　虚子の俳句解釋

この後の古墳の月日椿かな　虚子

古墳の前に立つて回顧の情に搏たれて其處に佇んで居る、といふやうな事は誰にもある事であるが、其古墳の昔を問はずに古墳の後の事をのべたといふ俳句は餘り詠まれてゐない。此の古墳は世に時めいた人の墳墓であらうか、其人はもう既に此墳墓の下に埋められて、もう五百年とか千年とかいふ永い時を經て居るのである。其古墳には、石碑の形を存じて居るのであるが、其碑の表てに刻まれて

ある文字は磨滅して解らない處もあるし、又は苔にとざされて、明瞭とは見えないで、只傳へられたまゝを記憶して居る處から、此古墳に對して回顧的の思ひが繰返されるのであるが、さういふ溯つた事を考へるにつけて思ふのは五百年又は千年前に生きて居た、此墳墓の主と五百年千年後になつて其墳墓の傍らに立つて居る處の自分と只時を隔てゝ世に存ずるばかりである。五百年千年前の此墳墓の主も生きて居た當時に置いて、又作者が考へて居るやうな迷想にふけつて居た事があるかもしれない。其のやうに自分も茲で考へる、又死んで行かなければならないものである。それはそれとしても思ひ出されるのは此後の事である、此後の五百年千年、もしくは永劫を經て此墳墓はどうなつて行くであらう。墳墓の主が死んだ當時は、親族知己に依つて香華も手向けられ、參詣する人もあつたであら

う。其人達も歿して今は無い。墳墓は只雨風の打つに任せ、苔深く蒸して居たのであつたが今は其石も知る人も稀になり尋ねる人もない。碑面は缺けては飛び、磨滅してはなくなり、形さへも風化して行くのである。それが五百年、千年の後にはかけたり磨滅したりする事は愚か、其石も此場處に止まつて居ない、跡方もなくなるかも知れない。とさういふ事を墓の前の立つて考へついたのである。これは墳墓といふものに對して、作者の哲學的の思想を浴びせかけて居るのであつて、自己の感懷をのべる事ともなるのである。古墳といふものは、それを眺めて居ると一種の感懷に搏たれて人の心を沈ませるのである。其古墳といふものを中心にして自分を考へると去來といふ頼みがたもないものにやるせない心を托して滿足されさうもない。それはどうする事も出來ない自然の數である。さういふ沈

んだ自分の心を引き立て眼前の此墳墓を眺めて居ると、此後の古墳がどうなつて仕舞ふものか、といふ一事に遭到するのである。新らしい墳墓といふものに對しては何等の感興をも催さないのが人情であるが古墳に對すると、靜かに眺められるのである。こういふ未來の事までが思ひ起されるのである　其墳墓の周圍であるか、又は傍には大きな一本の椿があつて、花が咲き滿ちて居る。其椿の木は此墓の守り主のやうにも見られるのである。さうして散りやすい椿の花が落花した時には墳墓は初めて明るさを持つであらう、さうした椿の落花が遂には腐つて形は無くなつて行く其椿の木には年々歳々花が咲いては散り、咲いては散る。其度に年を敷へるのである。此椿の木は墳墓と樹齡の一緒のものであつたらうか、後に人の植ゑたものであらうか、兎も角大樹が亭々と聳えて居る。其古墳がどうな

つて行くものであらうか、それを見守つて居るやうにも見られる。古墳も亦、椿の木を唯一の伴でゝもあるかのやうに、慕ひ合つて居るやうにも考へられる。無心の墳墓や椿の花に對して、作者の有情を吹き込んで此句を作つたのである。

蚰蜒を打てば屑々となりにけり　虚子

蚰蜒といふのはあの大きな長い足を持つた虫であつて、夜陰なぞに、家の壁や、部屋の隅などに現はれて何をするのであるか這ひまはるのをよく見受けるものである。さうして其からだと謂ひ、澤山の足と謂ひ、何處か妖怪めいた處のあるものであつて、古い家なぞには殊に多く住んで居るといふ事であつて、灯りの下で

女が縫物などをして居ると、蚰蜒が何處からか膝の上に落ちて來たりする事がある。兎に角氣味の惡い虫である。そんな虫でありながら直ぐに斃れるのであつて紙屑などで摘まゝれると、もう死んで居るのである。其死に方の早いのも何となく薄氣味が惡い。可愛さうといふやうな心持は微塵も起りはしないが、無氣味さが殘つて居るやうな氣がする、さういふやうな事から人が嫌がつて、蚰蜒が出ると起ち上つたり、逃げたりして蚰蜒の去るのを待つたり摘まみすてたりするのであるが、此句は其蚰蜒をそこらにめるもので、走つて行くのをうち止めたのである。さうして蚰蜒を捨てやうと思つて近よつて見ると其蚰蜒は足が散り〳〵ばらばらに拔けて仕舞つてからだが潰れて、これも引きちぎれてずた〳〵になつて疊にくつゝいて仕舞つて居る。さういふ光景を目擊して、ずた〳〵とか散り〳〵ば

らばらとか言はずに、やゝ誇張した言葉を借りて、くず〳〵になつたといふのである。其形はくず〳〵になつて仕舞つたといふ客觀的の光景の句である。と同時に其叙法が誇張されゝばされるほど、それが妖怪的の蟲であるだけに無氣味の感じがより多く出て來るのである。

くず〳〵となつたといふのはさういふ事實に打ち興じた處もあつて作つた句である。只屑になつたといふのでなくつて、くず〳〵になつたといつて其ちぎれた足なぞが疊の上にばら〳〵になつてゐる光景が目に見えるやうである。それは寫生が洗練されて居て、適切の言葉を用ひられて居るから出る感じであつて、平凡の技倆では此處まで強く蜘蛛といふものを現はす事はむづかしい。寫生の洗練された句である。

曼珠沙華秋の縫目の糸赤し　虚子

草叢に曼珠沙華が幾本となく連なつて咲き出した光景を眺めて、其儘を現はし出したといふ側の句では無いのであつて、それを作者の主觀に托してゐる句である。曼珠沙華が草叢に咲き出したとか、連なり咲いて居るとかいふ直覺的の感じを取らずに、秋といふものの中の赤い糸に比喩へて其曼珠沙華の赤い花が糸の縫目縫目が浮かび出て居るやうだと比喩へて居るといふ叙法であつて、非常に纖細な寫生の上からなり立つて居る主觀なのである。さういふ比喩を對照とした主觀句といふやうなものは唯、一遍の空想では其ものゝ眞實性を現はす事は出來ない

のであつて、曼珠沙華といふものゝ寫生が、しつかりと手に這入つて居る上に其れが曼珠沙華に對して、ふさはしい色調を持つたものでなければ其處に趣味の調和を見出すことはむづかしい、此句の如きは決して空想で出來上つたものではなくて曼珠沙華を寫生した句でもそれが主觀的に鋭さが增して來るにつれて、かういふ色調を描き出す事が出來るのである。此句は畫家が曼珠沙華を寫生して其花の細い線、絡み合つた花の狀態、さういふものを細かに描き出し、それを何本となく赤い繪具で寫して行く。さうした曼珠沙華を見て居ると其儘でも秋といふ時候が脊景になつて居て、此天地には秋といふ時候が瀰滿して居る中に、曼珠沙華がほつ〳〵と咲き出て居る美はしさを感じるのである。秋といふ無縫の天衣に赤い糸で縫はれて居る。其赤い糸は曼珠沙華であると、かういふ句なのである。

陀助や葉勝にも見ゆ花勝にも　虛子

此句は大正七年婦人俳句會を向島の百花園で試みた時の寫生句であつて、園內の一室に座つて居ると、眼につくのは軒にある一本の冬椿の大樹である。其大樹を取材として虛子先生が此句を作られたのであつて、其冬椿は陀助といふて落付いた感じのする椿の花なのである。丁度冬の曇つた日の夕方であつたので、其白い花が際立つて白く見えるのである。陀助といふても大樹の事であり、さうして其木を鎧うて敷限りなく澤山の花が咲き滿ちて居たのであつた。さうして又其木の葉も茂つて居て黃昏の色を受けつゝも艶やかに光つて見られるのであつた。其

佗助の大樹の靜かに茂つて居る樣を見ると葉の勢ひが勝つて居るので、葉勝にも見えるし、又其白い花に眼を留めて居ると、瓣を觸れて咲き合ひ、隣り合ひ、重なり合つて居る處の花がまるで其木は花ばかりのやうにも見える。さういふ特意な佗助の木を目擊しながら虛子先生は、「佗助や葉勝にも見ゆ花勝にも、」と感じられたまゝをのべられたのである。此句は勿論寫生の句であつて雜念を濾過して純粹の寫生の境地に立つて頭を働かした時に考へられる想である。唯木の狀態を細密に寫生するのでなくつて、其寫生は頭の中で洗練されて其のエキスだけが出て來た、といふやうな方法なので寫生の爲めの寫生句にはならずに、そこに自己の感じといふものを化合さして始めて構成されたところの俳句と認めなければならない。

虛子先生の近來の寫生句は忠實に其ものを寫生するといふ事を努めるばかりでなく、其寫生が洗練され其エキスだけを叙述するといふ點があつて其句が生かされて、力强く現はれて來るものがある。さういふ句は先生のどの句にも認められてゐたのであるが近來一層顯著のものとなつた。

諸君は常に忠實にものを寫生するといふ上に專念であつたならば、其專念の境地からして新らたに自分の特技を產み出し、自分の天地を開拓する基を築く事となるのであらう。

これで代表的とも目さるゝ古今の俳人二十八人の俳句の解釋を試み終つた

譯である。此の解釋を讀まれて不滿足に思ふ點も多からう。それは止むを得ぬ。けれども、一人でも二人でもよい此の解釋を讀んで多少作句に裨益し、增進する事が出來たならば幸である。それは讀者諸君自らの心の側の問題であつて是等代表的俳人の俳句を吟味し又それを自句の研究に移して自らの道を開拓する方法をとつたならば益する處は些少ではないと信ずる。

作り方を主としたる俳句講話　俳句の解し方　終

□著作權所有□

大正八年九月八日印刷
大正八年九月二日發行

俳句の解し方

定價金壹圓拾錢

著者　長谷川諧三　東京府豐多摩郡淀橋町柏木九四四

發行者　宇野共次　東京府豐多摩郡戸塚町下戸塚三

印刷所　白井赫太郎　東京市神田區美土代町一ノ二十一

發行所　東京市牛込早稻田中學横通り　振替口座東京三九六三四番　春水社

長谷川零餘子先生著

平福百穂先生繪
大正寫生

一萬句選

附全國俳句會一覽

洋布裝箱入
紙數四五〇頁
價壹圓參拾錢
送料六錢

大正元年より同八年に至る雜誌ホトトギスの東京俳句界、地方俳句界、海外俳句界の選句を集めたるものなり。俳人必備の書

俳句とその作り方

布裝短冊寫眞入
紙數一七〇頁
價七拾錢
送料四錢

俳句は、何んな風に作つたらよいかといふ問に對して、初心者にもよく分るやうに作るべき道を明かにしたものである

趣味の模範
新註

俳人の手紙

裝釘高雅
紙數三五〇頁
價八拾五錢
送料六錢

古今俳道大家の最も趣味に富める手紙二百餘篇を集錄し評傳註釋を附したるもの、文章に志す者俳諧に遊ぶ者の必讀すべきもの

袖珍俳句歲事記

洋布裝箱入
總紙數五百頁
價壹圓貳拾錢
送料六錢

新題の饒多、例題の豐富、解釋の明瞭、携帶の至便、これ眞に寶なる歲事記にして殊に運座旅行にはお誂へ向きの好著なり

袖珍俳句歲事記（分本）

全四冊

價各冊參拾錢
送料各冊貳錢

春の部。夏の部。秋の部。冬の部の四冊に分本したるもの

338
338

10.12.15

終